

## 《研究ノート》

## 三好豊太郎教授の「社会事業」研究（2）

## —青少年の問題行動の社会的・実証的研究—

高 島 秀 樹

## 目次

## はじめに

1. 「社会事業」の基礎的理解
2. 三好豊太郎教授の青少年の問題行動の研究
3. 少年と社会関係の異常性
  - （1）『少年と社会関係の異常性』
  - （2）本研究における研究課題・研究方法・研究経過
  - （3）少年の生活史
  - （4）社会関係の諸状態
  - （5）遺伝並びに心身の状態
  - （6）発生原因並びに類型の考究
  - （7）結言

## おわりに

## はじめに

本稿は、1965（昭和40）年に開設された明星大学人文学部社会学科（当時、現：人間社会学科）の開設初期に在任した教員の研究業績について明らかにし、記録することを直接の目的とし、それを通して開設初期の社会学科の教育・研究の実態・特質を明らかにする一素材を提供することを間接的な目的としている一連の試み<sup>1)</sup>の一部をなすものである。本稿においては、前稿に引き続いて開設以来20年にわたり社会福祉分野を中心とする教育・研究を担った三好豊太郎教授の社会事業研究について明らかにすることを目的とする。

前稿においては、『社会事業大綱』（1936（昭和11）年）、『社会事業精義』（1939（昭和14）年）の2著書を主な素材として三好教授が示した社会事業の概念・基礎理論を明らかにした<sup>2)</sup>。本稿においては、三好教授の社会事業研究の中で、個別領域の研究、実証的研究について取り上げる。前稿において三好教授の個別領域の研究、実証的研究の領域は大別するならば、①青少年の問題行動を中心とする社会問題の研究、②労務管理・労働者厚生の研究、③社会事業実践の方法論・技術の研究の3領域に整理して把握できるのではないかという私案<sup>3)</sup>を示したが、その中から①として位置づけた青少年の問題行動についての研究を取り上げる。こ

の領域を選択したのは、社会問題の研究に社会学的方法を適用することを明確に行った先駆的研究であることによる<sup>4)</sup>。

本稿においては、『少年と社会関係の異常性』1937（昭和12）年7月30日、財団法人中央社会事業協会社会事業研究所刊を主な素材とし、関連する「不良少年に関する調査」（『草創期における社会事業の研究』1989（平成1）年、所収、初出年・掲載誌不明）、『不良児童と職業との関係』1936（昭和11）年7月28日、財団法人中央社会事業協会社会事業研究所刊を参照して、三好教授の青少年の問題行動に関する研究について明らかにする。

## 1. 「社会事業」の基礎的理解

前稿で明らかにしたように、三好教授は社会事業の概念を次のように示している。

…（略）…社会事業は個人又は諸種の集團が（主體）個人又は集團間の不合理なる社会的關係を（對象）都市的又は農村的環境に應じて（形態）個別處理及集團處理によつて（方法）豫防、減少、除去及合理化をなす（目的）ことをいふのである。

このように最も基礎的な概念を示した上で、社会事業の対象については、「非經濟性」、「社会的異常性」、「要救護性」があるが、それらの中で基本は「社会的異常性」であり、それは同時に「社会結合の異常性」であり、「換言すれば心的相互作用なる社会的機能の活動の緩慢又は偏傾を示すものと見ることが出来る。」とより詳しく説明している<sup>5)</sup>。また、社会病理現象の基本は社会関係の異常性であるにとらえ、その三大類型として社会関係の中絶型、緩慢型、偏傾型があげられるとしている<sup>6)</sup>。

社会事業の対象を「不合理なる社会的關係」、「社会的異常性（=社会結合の異常性）」、「心的相互作用なる社会的機能の活動の緩慢又は偏傾」とし、さらに社会病理現象の基本を社会関係の異常性にとらえる考え方が、青少年の問題行動の研究においても基礎的な考え方となっている。なお、この考え方が、三好教授が社会事業の理論的・学問的基礎として社会学を重視する考え方に立つと今日でも評価される理由になっていると筆者は考えている。

## 2. 三好豊太郎教授の青少年の問題行動の研究

三好教授は、本稿で主な素材として取り上げる『少年と社会関係の異常性』1937（昭和12）年、に先行する青少年の問題行動についての研究として、2件の実証的・実践的調査研究を行い、各々の報告書を刊行している。

その第1は、「不良少年に関する調査」であって、「序」には「本稿は東京市社会局において、私が調査したものである。同局においては第一次および第二次調査の結果を、調査の完了を待って、発表の予定である。本篇はその第一次調査の分である。」と記されている。この調査研究の報告は三好豊太郎『草創期における社会事業の研究』1989（平成1）年、に収録されているが、同書に掲載された佐藤健二「解説」においては初出誌・刊行年月は不明であると記されている。この研究の目的は、近代の大都市の急激な膨張に伴って発生する重要な社会問題の一つとして「不良少年問題」を取り上げ、その原因を実証的に明らかにし、その対応策を考えることであつた。ここで報告された第一次調査は1922（大正11）年4月～7月に市内39・市外14、合計53の警察署を訪問し、「各警察署に備え付けてある要視察中の不良少年の調査票を抄写」したものであつて、その調査項目は1.

住所、2. 本籍地、3. 出生地、4. 体格、5. 生年月日および年齢、6. 父母の有無、7. 父母の職業、8. 兄弟姉妹、9. 教育程度、10. 職業、11. 趣味嗜好、12. 綽名<sup>あだな</sup>、13. 性行、14. 原因、15. 犯罪行為、16. 備考、17. 所轄警察署の17項目であり、集計対象数は男子853票・女子70票、合計923票であった。報告書の「二 不良少年の概況」においては、項目ごとの調査結果の統計的分析結果が、さらに「三 不良少年と諸関係」においては、2項目以上の相関関係の統計的分析結果が示されている。「三」の末尾に記された「総括」において「…（略）…本篇を一貫して流れる少年労働者（職工・徒弟、屋外労働者）と不良少年との関係の密接なることについては、さらに慎重に研究を進める必要を痛感するものである。」と指摘していることは、次の『不良児童と職業との関係』という研究課題をこの時点において意識していたことを示唆していると筆者は理解している<sup>7)</sup>。

その第2は、『不良児童と職業との関係』1936（昭和11）年7月28日、財団法人中央社会事業協会社会事業研究所刊である。この研究の主体であり、報告書の発行所である財団法人中央社会事業協会社会事業研究所による「例言」には研究の目的について、「…（略）…目的とする處は不良児童と職業との関係に就いての研究を進め、教護教育、保護及矯正教育の参考たらしめんとするにある。」と記されている。さらに注目すべき内容として、「児童不良化の原因並に経路に關しては、後日尙不良児童の一般環境及び素質に關する調査を進めて逐次之を發表する豫定であるが、こゝにはその第一回報告として、先づ男子の教護院に於ける収容児童に就いて實地調査研究した結果を主とし…（略）…」と、より多くの要因との関係についての研究の一環もしくは出発点をなすものであること

が記されている。この点に関して、「三、本研究の方法、準備及経過」においても不良化因子の全てにわたって研究する方法もあるが、その実現にはいくつかの課題があることから、一因子と不良化の関係を研究することから始めることとし、「職業と不良児童發生との關係」を取り上げることとしたと記しており、いずれにおいても、後に刊行される『少年と社会關係の異常性』への研究の展開を視野に入れた研究であることを明らかにしている。具体的な研究方法としては、1936（昭和11）年6月に東京市養育院井ノ頭学校在籍の少年112名のうち就職の経験のある52名に聞き取り調査を実施し、有効回答者49名について各々の生活史と職業史を明らかにし、さらにその結果を統計的に分析している。「七、結び」においては、その研究の結果をまとめて、①不良児童の發生に対して就業、特に早期就業（14歳未満の就業）が著しい關係を持つ、②転職を重ねる毎に不良行為が認められる児童が漸増すると示し、それらをふまえて、③教護院におけるより適切な職業教育のあり方を提起している<sup>8)</sup>。

### 3. 少年と社会關係の異常性

#### （1）『少年と社会關係の異常性』

以上に示した2先行研究をふまえて、三好教授が青少年の問題行動と社会關係の異常性の關係について総合的に研究した成果が『少年と社会關係の異常性』1937（昭和12）年7月30日、財団法人中央社会事業協会社会事業研究所刊である。

『少年と社会關係の異常性』はA6版、160頁であり、その目次は次に示す通りである。

## 目次

- 第一 緒言
- 第二 本研究の方法及経過
- 第三 少年の生活史
- 第四 社会関係の諸状態
- 第五 遺傳並に心身の状態
- 第六 發生原因並に類型の考究
- 第七 結言<sup>9)</sup>

『少年と社会関係の異常性』の研究目的については、前著と同様にこの研究の主体であり、報告書の発行所である財団法人中央社会事業協會社会事業研究所による「例言」には次のように記されている。

この篇はさきに報告した「不良児童と職業との関係」の第二輯に相當するものであつて矢張本研究委員三好豊太郎氏の勞を煩はし、主として少年不良化と社会関係の異常性との相關を研究したものである。即少年の遺傳並に心身状態に對照して社会関係の異常性は如何なる程度まで少年不良化に影響するものであらうか、並に社会関係の異常性は如何なる類型に之を把握することが出来るであらうか、これ等の諸點を明かにせんが爲に研究を進めたものである。

この方面の實際家並に研究者のために何等かの寄與するところがあれば深く幸甚とするものである<sup>10)</sup>。

この「例言」によれば、青少年の問題行動の原因としては遺傳的要素、心身状況、社会関係が想定されるが、その中で特に社会関係に焦点をあてて明らかにすることをこの研究は目的としていると理解することができる。

## (2) 本研究における研究課題・研究方法・研究経過

三好教授は「第一 緒言」において「さきに『不良児童と職業との関係』を發表し、そのうちに歐米に於ける不良児童研究の一端を挙げ、その發生原因中に遺傳關係と共に社会関係の研究の重要性を擧ぐるもの、漸く多きを加へつゝあることを述べたのであるが、こゝにはこの兩者の研究を少々詳細に採り入れながら、特に社会關係中就中、家庭關係の研究に深入したのである。』<sup>11)</sup>と記している。ここに記されている發生原因中、遺傳關係に関する研究としてはG.J.Mendel、F.Galtonの研究について、犯罪者の遺傳的要素に関する研究としてはDugdale、Goddardの研究について簡潔に紹介している。

これらの研究が示す「不良児童研究」における遺傳的因子の解明が重要であるとの考えも取り入れた上で、「これらの諸點を綜合して、不良行為の形成についての基本的な公式を考へることが出来ると思はれる。」としてL. von Wieseの社会過程として現われる事象（生産物）Pを形成する因子を示す次の公式を引用する。

$$P = H^{(ママ)} \text{ (Haltuug 行動)} \times S \text{ (Situation 情勢)}$$

HとSはさらに、

$$H = I \text{ (Ichheit 個性)} \times E \text{ (Erfahrung 經驗)}$$

$$S = U \text{ (Umwelt 環境)} \times H_1 \text{ (Haltung 他者ノ行動)}$$

を内容とする。

前掲の公式はHとSの各々の内容を取り入れると、

$$P = I \times E \times U \times (I \times E)_1$$

と示される。

このように、「…（略）…社会事象たる生産物のPが個性、経験、環境及他人の行動によって、決定されることを明瞭に理解することが出来る。」としている。これは一般的な社会事象（生産物）についての公式であるが、「一見極めて複雑なる犯罪現象及不良行為の形成についても、之等の因子の解釋は殆んどそのまま應用することが可能であって、このIの中に遺傳關係及心身狀態を含めるならば、不良行為Kは次の如く公式化することが可能である。」として、次に示す公式を提案している。

$$K = I \times E \times U \times (I \times E)_1$$

これは「仮説」であって、「この公式は實際の不良行為を研究するに當つて、果して何の程度まで適用し得るであらうか、且つ各因子の相關は如何に之に現はれる<sup>(ママ)</sup>て來るであらうか。」を検討することが第1の研究課題（研究目的）であるとしている<sup>12)</sup>。

次に、三好教授がこの数年来、救助者と被救助者の社会關係、雇主と被傭者の社会關係、家庭における社会關係等の研究において、「…（略）…テンニースの共同社會と利益社會との社會關係が、基本的對立をなし、これらの社會關係を二つの類型に分つことが社会事象の理解の上に極めて重要な意義を認めることを見、これを養育者と被養育者との關係について如何に考究せらるべきかを發見せんと試みた…（略）…」ことを示している。さらに、A. Vierkandt、F. Oppenheimer、G. Simmel、L. von Wieseらの社会關係の類型的研究を紹介した上で、「不良兒發生の社會關係をかゝる關係の立脚地によつて研究すれば如何なる特異性を發見し得るであらうか。」を検討することが第2の研究課題（研究目的）であるとしている。具体的には、F.Tönniesの示した共同社会關係

と利益社会關係の考え方を採用し、共同社会關係は自然發生的、有機的、情意的關係であり、利益社会關係は人為的、機械的、理知的關係であり、家庭關係の中でいえば、前者の例は祖父母孫、実父母子關係であり、後者の例は継父母子關係であると示している。その上で、「之等の二つの社會關係が子女の養育に及ぼす影響は大いに考究の餘地がある。」<sup>13)</sup>としている。

この研究の具体的な研究方法と研究経過については「第二 本研究の方法及経過」に記されている。

研究は、東京府下某少年収容所生徒100名を対象として、1936（昭和11）年8月～9月に「少年調査表」から心身狀態、遺傳關係などの調査事項を摘録し、さらに三好教授が作成した独自の「社會關係表」を用いて1日10名程度に面接聞き取り調査を実施している。その聞き取り調査の項目は、1. 出生地關係、2. 家族關係、3. 学校關係、4. 職業關係、5. 交友關係、6. 娛樂關係、7. 不良行為の史的發展であり、それらから、「社會關係異常性の判定」を行っている。ここにおいて既に、「…（略）…一つの不良行為の前には常にそれに先行する經驗が必ずあるのを發見するのであつて、かゝる點において主要な原因の發見をなしたものが數例ある。」と結論的な知見を示している<sup>14)</sup>。

本報告書においては聞き取り調査の結果を生活史、社会關係、心身狀態及び遺傳關係に整理して記載しており、それらを総合して發生原因の総合的考察と類型を示している。

### （3）少年の生活史

三好教授は初めに「…（略）…少年の遺傳關係、社會關係、不良行為等を端的に捕へて、その輪郭を髣髴させるために、少年の生活史…<sup>(ママ)</sup>



(略) …」を記載している。その上でより詳細な事実を知りたい場合には、以下に示されている「社会関係」、「心身状態」を参照すべきことを示している。生活史の記述方法については、どのように聞き取り調査の結果を整理し記述したかは明示されていないが、報告書の記載内容・形式から判断すると聞き取り調査の結果を整理・要約して本人の談話形式として記載したと考えられる。記載は対象者100ケースごとに行われているが、一例として第1ケースを示すと、次の通りである。

#### 第一ケース 柴 ○ 武 ○ 十七歳五月

父は運送屋で酒客であり、飲むと酒癖が悪く、粗暴で、急性肺炎のため、本人十二歳の時死亡した。間もなく母は現在の継父を迎えた。元は馬十七頭をおいて手広く砂糖運搬をやつてゐた。母は五十四歳で現に健在である。不就學で勝氣、頑固な性格で異父兄弟が一人、他は同父母同胞が六人ある。

八歳頃から買喰をはじめ、金銭を虚言をもつて、請求し持出し費消し、本人十二歳のとき父死亡後は母に反抗して命に従はず小學校勉學を嫌ひ三年頃から抜け遊びをし、度々喧嘩をした。學校は成績不良で、十三歳の時蕎麥屋奉公、喧嘩して無斷退去した。大洋軒(父の死亡のため退く、<sup>(ママ)</sup>ピーヤホール)兄さんがひまをとつた。蕎麥屋奉公へ呼び出されて止める。交友不良で脅喝を行ひ喧嘩を頻繁にし、搔拂をなし、少年指導會を一ヶ月、職業學院を十日にて逃走した<sup>15)</sup>。

このような形式で100ケースについて記した上で、まとめとして「これら少年の生活史に就いて見たところによれば、其發生因子に就いて種々なる示唆を受くるのであるが、不良行為の形成過程が一つの定型をもつて漸進的に發展し

て行く點を認めることが出来るのであつて、重要な一研究分野なることを思はしめる。』<sup>16)</sup>との考察結果を示しており、不良行為の形成過程・漸進的發展過程について定型が認められることを結論的に示している。そして、その過程を解明することが重要な研究課題となるとしている。

#### (4) 社会関係の諸状態

生活史という形式で各対象者の概況を示した上で、より詳細な事実を示す第一として各対象者の社会関係を取り上げ、「つぎには左の項の如くにして社会関係の諸状態を少々詳細に摘録して、社会関係の異常性を明かにするこ<sup>(ママ)</sup>とした。』<sup>17)</sup>としている。社会関係については、100ケースの対象者ごとに「一、出生地及居住地の状況、二、家族関係、三、學校関係、四、就職関係、五、生活史、不良行為、保護関係」の5項目に整理して記載しており、生活史の項目における記述内容と一部重複する内容もあるが、一例として第1ケースを示すと、次の通りである。

#### 一、柴 ○ 武 ○ 一七歳

一、東京市四谷區永住町に生れ澁谷區に移り後に、三回移轉す。

二、父運送屋で死亡、母五十四歳異父入婚す。生父在生頃は馬十七頭をおき砂糖工場の運搬に従事す。夫婦の仲は悪しからざりき。

三、<sup>(ママ)</sup>常々五年にて好まずして中途退學。

四、1. (第一回就職)

a. 蕎麥屋(澁谷區)

b. 一年間一三歳の時

c. 過つて茶をかけ謝しなかつたので打たれ、同職と喧嘩して止め

る。

## 2. (第二回就職)

- a. 大洋軒（ビヤホール）
- b. 前借五〇圓を借りて行きそれが分つて母に反抗心を持つ、
- c. 父の死亡の爲兄が暇を取る。

五、八歳の時買喰をなし、虚言にて金銭を請求し費消す、十二歳の時父は死亡す、その後母の命に従はず度々喧嘩す、學業成績は不良、交友不良、脅喝、喧嘩頻繁、搔拂ひ、指導會は一ヶ月、職業學院<sup>(ママ)</sup>八十日にて逃亡す<sup>18)</sup>。

100ケースについてこのように項目ごとに記載した上で、「これら社會關係の諸状態を見るときは、著しき迄に其異常なる關係が含まるゝのを見出すのである。少年の誤れる社會過程は、誤れる社會關係に出づと見做しても良い程である。居住地關係、家庭關係、學校關係、職業關係、娛樂關係、交友關係等何れも其個々の社會關係が示すものが大きい しかしこのうち就中家庭關係の病的状態が影響するところが甚だしい様に思はれる。」との考察結果を示している<sup>19)</sup>。青少年の問題行動の原因として「社會關係」、特に「家庭關係」のあり方が大きく影響しているという考え方を導き出しているのである。

## (5) 遺傳並びに心身の状態

次に、より詳細な事実を示す第二として各対象者の遺傳ならびに心身の状態を取り上げて、「こゝには次の項下に遺傳及心身の状態を少々詳細に記録することにする。」としている。遺傳・心身の状態については、100ケースの対象者ごとに「一、精神欠陥の種別、二、父母、同胞の心身状態、三、本人の既往傷病状態、四、

健康状態、五、現在疾患其他、六、智能、七、氣質、八、性格」<sup>20)</sup>の8項目に整理して記載されており、ここでも前項と同様に生活史の項目における記述内容と一部重複する内容もあるが、一例として第1ケースを示すと、次の通りである。

### 1. 柴 ○ 武 ○ 十七歳五月

一、精神薄弱者（魯鈍、興奮性格）

二、父、運送屋酒客、酒癖粗暴、急性肺炎死

母、健在、不就學、勝氣、頑固

異父同母一子、同父母<sup>(ママ)</sup>五人、女二人、男四人、本人<sup>(ママ)</sup>第六子。

三、難産 産後三ヶ月の頃本人を負背し、本人を墜落させた爲腦を悪くしたと云ふ 十一歳自轉車にて川に落ち後頭部裂傷 十二歳胃腸を病む。

四、健康

五、右眼球震盪症、外痔核

六、下（向上の可能性可）

七、勝氣淡泊

八、興奮性格（被影響性著しく刺戟によつて動かざる事著しく、一定方向に馬車馬式<sup>(ママ)</sup>に猪突し熟練反省に乏し）<sup>21)</sup>

このような形式で100ケースについて記載した上で、「この遺傳並びに心身状態調査を見ると、両親の犯罪性、同胞其他の自殺、飲酒、精神欠陥等に就いて、甚だ多くの例を見出すのであつて、社會關係の異常性と共に、誠に重要な一方面なることを知られる。殊に本人に就いて見ると、精神薄弱者、性格異常者、精神病者身體欠陥者等を見ること甚だ多いことを知り得られる。」<sup>22)</sup>との考察結果を示している。三好教授は青少年の問題行動の原因として社會關係に注目しているものの、それのみに限定するこ

となく遺伝的要素、心身の状態が影響していることも認めていたと理解することができる。

#### (6) 発生原因並びに類型の考究

以上の原因ごとの考察結果を受けて、次に青少年の問題行動の原因についての総合的な考察結果と、その類型について、「一、緒言 二、社会関係の異常性 三、社会関係及遺傳關係 四、社会関係及生理的欠陥 五、類型の考究」の5項目に整理して示している。

「一、緒言」においては、はじめに「…(略)…各個の少年について、個人別に発生原因を考究しそれを一乃至三の因子に環元して見ることにした結果をあげる…(略)…」として、例示するならば「一、柴 ○ 武 ○ 家庭關係(家運の没落實父の死亡)及第一回就職の失敗並遺傳關係」という形式で因子を記している。この事例は3因子によるものであるが、100ケースについてこのようにまとめると、「単一の原因によるもの」14、「二種の原因によるもの」75、「三種の原因によるもの」11ととらえられと整理している。このうち、社会関係について見ると、「社会関係が主たる原因をなせるもの」29、「純粹に遺傳關係のみが原因せるもの」0、「社会関係及遺傳關係の加はれるもの」65、「社会関係と生理的關係の加はれるもの」6、と単一の場合と他の要因と複合するものを合わせて考えるならば、全てのケースに社会関係が関係していることを示している<sup>23)</sup>。

「二、社会関係の異常性」においては、このようなまとめを受けて、社会関係が主原因になったとする29ケースについて、原因となった社会関係の異常性の内容を示している。その中には単一の社会関係が原因になるものと複数の社会関係が原因になるものがあるが、それを次のよう整理して示している。

社会関係異常性	合計
1. 居住關係	1
2. 家庭關係	9
3. 職業關係	1
4. 交友關係	3
5. 家庭關係及交友關係	6
6. 家庭關係及職業關係	5
7. 家庭關係社會施設の不備	1
8. 家庭關係及學校關係	1
9. 家庭關係娛樂關係	1
10. 職業關係及居住關係	1
計	29

このような整理の結果、単一の原因の場合においても複数の原因の中の一原因となる場合においても、社会関係の中で家庭關係が29ケース中23ケースときわめて大きな比重を占めていることを示している。この後に、問題行動の原因になったと考えられる各社会関係の内容についての考察が記されているが、家庭關係を単一の原因とする9ケースについては「溺愛、盲目的な愛」が原因と認められるものが5ケース、「繼父關係」が原因と認められるものが5ケースと大きな比率を占めている。複数の原因中に家庭關係が含まれるケースについても、一例として「家庭關係及交友關係」の事例を見ると、「これによつて見ると何れも家庭に於ける實父母關係の消滅と不良交友關係の成立とが、密接な關係をもつて居ることが明かである。」と記しており、他の複数の原因中に家庭關係が含まれるケースにおいても、家庭關係のあり方が他の關係のあり方に大きく影響しているという調査研究結果・考察を示している<sup>24)</sup>。

「三、社会関係の異常性及遺傳關係」においては、「社会関係及遺傳關係の加はれるもの」65事例について分析し、記している。さらに、この項目の中で「社会関係及生理的欠陥」に分



類された6事例についても続けて分析し、記している<sup>25)</sup>。

「五、類型の考究」においては、「社会関係の諸因子を總括」して次のように示している。

居住地関係	4
家庭関係	71
職業関係	18
交友関係	22
学校関係	5
娯楽関係	4
社会関係	1
計	125 <sup>(ママ)</sup>
一人當り	12.5 <sup>(ママ)</sup>

この中で家庭関係が125因子中71因子(56.8%)と最も多く、重要性を持つとして、家庭関係について総括し、「親子関係の中絶状態(生死別)並に異常継続の状態を擧げることが出来る」と示している。「異常継続の状態」については、「繼父母関係を代表とする一團の社会関係(A)」と「溺愛関係を代表とする一團の社会関係(B)」に分類している。各々の型についての事例の分析から、A型においては「…(略)…欲望が十分に満されない爲に(特に食慾)之を不正な方法で得ようとし、幼くして虚言、教唆を行って食慾を充すことを計り、また長じては家出浮浪、野宿等になり、或ひは自暴自棄となり…(略)…遂に各種の不良行爲になつて居る。」とする。B型においては「…(略)…野育ちとなり、放縦粗暴となり、怠惰となり、時局浮浪、搔拂等各種の不良行爲をなす傾向を持つ事となる。」とする。この2類型について、A型は「利益社会関係の過度なるもの」、B型は「共同社会関係の過度なるもの」に相当するものとされ、これによって、「…(略)…家庭関係の類型的把握は充分に到達し

得たものと考へられる。」と結論づけている<sup>26)</sup>。

## (7) 結言

以上の考察を終えて、「第七 結言」において「第一 緒言」において示した二つの研究課題(研究目的)、①仮説として示した公式、 $K = I \times E \times U \times (I \times E)_1$  が「この公式は實際の不良行爲を研究するに當つて、果して何の程度まで適用し得るであらうか、且つ各因子の相関は如何に之に現はれるて来るであらうか。」<sup>(ママ)</sup>を検討すること、②「不良兒發生の社会関係をかゝる關係的立脚地によつて研究すれば如何なる特異性を發見し得るであらうか。」についての検討結果を含め研究の結論4項目を示している。

その第1は、「…(略)…少年不良化に對して持つ社会関係異常性の影響」が大きく、その中でも「これらの社会関係異常性の中で最も多いのは家庭関係の異常性であつて、この中七〇<sup>(ママ)</sup>を占めて居る。家庭関係異常性の持つ重要性を明確に認めることが出来る。」ということである。青少年の問題行動の原因として「社会関係の異常性」、その中でも特に「家庭関係の異常性」が重要な原因となっていることを研究の結論として指摘している。

その第2は、仮説として示した  $K = I \times E \times u \times (I \times E)_1$ <sup>(ママ)</sup> の公式について、「いまKの内容を被害程度、不良行爲の頻數、及其継続性等に分つて特定量として考へるならば右項の各因子は密接なる相関を持つこと明かであつて…(略)…」Iの数値が小であっても、他のE、u、 $(I \times E)_1$  のいずれかの数値が大であれば、同一量の不良行爲を生むとしており、逆にIの数値が大であっても、他のE、u、 $(I \times E)_1$  のいずれかの数値が小であれば、同一量の不良行爲を生むとしており、各項目間

の関係を明らかにすることも含めて、仮説（公式）を肯定し得ることを研究の結論として指摘している。さらに、I（個性）の内容については調査研究結果をふまえて、 $I = (A (=Anlage \text{ (ママ) 素質}) \times S (=Psychologische \text{ (ママ) Status 心理学的状態}) \times Y (=Physiologische \text{ (ママ) Status 生理学的状態}))$  ととらえることができ、仮説として示した公式は $K = (A \times S \times Y) \times E \times u \times (I \times E)$ とより詳しく示すことができると指摘している。このように青少年の問題行動の原因となる因子、特に「…（略）…Kの内容は複雑であり、其治療及矯正は各方面からせねばならぬことは略々推察し得る處である。」と実践的な提言を行っている。

その第3は、社会関係のあり方について、F.Tönniesの提言した2類型に基づいて社会関係の中の家族関係について考察した結果、A型=過度の利益社会関係とB型=過度の共同社会関係の二つが基本的な類型ととらえられたこと、「即ち過度緊張関係及過度の弛緩関係が病的社会関係を形成するものと認められる。」ということを結論として指摘している。これをふまえて、青少年の問題行動に対する教護・矯正においてA型の者に対しては共同社会関係をもって、B型の者に対しては利益社会関係をもってなすことが望ましいと実践的な提言をしている。

その第4は、結論ではなく次の研究課題と考えられるが、「…（略）…今般は主として社会関係中でも家庭関係に中心を置いて考究を進めたのであるが、其他居住関係、学校関係、職業関係、娯楽関係、等に就いても同様に夫々の異常性が影響して、少年不良化の因子たる場合が見出された。これらは更に詳細なる研究を進めて行くことが必要であると思はれる。」と記しており、実践的には「結局之等社会関係の異常性が明かになつて始めて、正規な社会指導が可

能となるものと考へられる。」と記している<sup>27)</sup>。

## おわりに

以上、三好教授の『少年と社会関係の異常性』について紹介した。おわりに、『少年と社会関係の異常性』を中心に「不良少年に関する調査」、『不良児童と職業との関係』も参照して、三好教授の青少年の問題行動に関する社会的・実証的研究の位置づけ・意義として次の4点を指摘したい。

その第1は、三好教授の青少年の問題行動に関する研究はこの領域における先駆的研究であると位置づけられる。

『少年と社会関係の異常性』も含む三好教授の論文を収めた『草創期における社会事業の研究』1989（平成1）年、の編集・解説を担った佐藤健二は「解説」において、「不良少年」というテーマの歴史性と普遍性について示している。それによると、近代産業社会は「少年」という新しいカテゴリーを作り出したが、「少年」について一方において「…（略）…産業を支える良質で安価な労働力として、期待し使役するメカニズム…（略）…」を拡大させ、他方において「少年」は「…（略）…学校—家庭（もしくは地域社会）システムのなかで愛情をもって保護され、その成長が保証されねばならないという理念を発展させることになった。」のであり、「…（略）…『不良少年』に対する関心の根源には、こうした近代産業社会に普遍的な問題設定が横たわっている。」との認識を示している。その上で、日本において「不良少年」の問題が「社会問題」として意識されるようになってきたのは大正期からであると指摘している<sup>28)</sup>。

この指摘をふまえて考えるならば、三好教授

の「不良少年に関する調査」（刊行年不明・1922（大正11）年調査）、『不良児童と職業との関係』（1936（昭和11）年）、『少年と社会関係の異常性』（1937（昭和12）年）は、日本において青少年の問題行動が顕在化し、社会問題として意識されるようになった時期にその研究に取り組んだ先駆的研究としての意義を持つと評価することができる<sup>29)</sup>。

その第2は、研究方法論として、青少年の問題行動とその原因の究明に社会学的視点を取り入れた先駆的な研究であると位置づけられる。

青少年の問題行動、特に犯罪・非行の原因についての考え方の系譜・発展について考察した住田正樹は、先駆的研究としての「鬼神論」、「快樂－苦痛論」「生来性犯罪者説」などを経て、1930年代以降、主としてアメリカにおいて社会的要因に注目する考え方が発展し、「…（略）…社会規範に対する人々の共感の欠如によって社会に諸々の機能障害が生じるとする…（略）…」 「社会解体論」を出発点とし、その後「…（略）…非行文化の学習過程に注目し少年の非行性の形成という、いわば非行化過程に焦点をおいたアプローチ…（略）…」である「文化伝達論（文化伝播理論、分化的接触理論、分化的同一化理論、自己観念の理論）」、「…（略）…少年を取り巻く環境自体の問題、つまり社会構造が少年に働きかけて非行を生起せしめるといふ社会構造自体の非行誘発性に焦点をおいたアプローチ…（略）…」である「社会構造論（文化葛藤論、非行副次文化論、アノミー論）」などが提唱されてきたと総括している<sup>30)</sup>。

この考察結果をふまえて考えるならば、三好教授は早くも1920年代から青少年の問題行動の原因として社会関係に注目しており、さらに1930年代の実証的研究においては明示されていないとしても「文化伝達論」、「社会構造論」的

視点が実証的調査の枠組みやその結果の分析に取り入れられていると理解することができる。さらに、社会行動・社会関係に関する社会学研究の成果を取り入れており、青少年の問題行動についての研究に社会学的視点を取り入れた先駆的研究としての意義を持つと評価することができる。

その第3は、青少年の問題行動とその原因の究明について社会学固有の研究手法・研究技法が用いられており、研究方法・研究技法から見ても社会学的な研究であると位置づけられる。

その理由の第1は、科学的研究としての社会学研究の最も基本的な考え方である「仮説＝検証」という考え方に立ち、それを実証する研究方法を採用していることである。その理由の第2は、「不良少年に関する調査」、『不良児童と職業との関係』、『少年と社会関係の異常性』のいずれにおいても社会学の研究手法・研究技法の一つである数量的方法・統計分析が採用されていることである。その理由の第3は、『不良児童と職業との関係』、『少年と社会関係の異常性』では統計分析と同時に、社会学の研究手法・研究技法の一つである「生活史法」が取り入れられていることである。先にも取り上げた「解説」を執筆した佐藤健二は、ここでいう「生活史法 life history method」は、今日一般に用いられる「口述の生活史 oral life history」とはかなり異なっているが、「…（略）…統計的な全体考察の中で埋もれてしまっていた個人に焦点をあてることを通じて、質的な関係分析に向かう努力であったことは評価されてよい。」<sup>31)</sup>と積極的に評価している。

このように「仮説＝検証」という考え方を基礎とし、実証のために調査を実施し、統計分析を行うとともに「生活史法」を用いていることから、研究方法・研究技法という観点から見て

も社会学的な研究としての意義を持つと評価することができる。なお、前項で明らかにしたように三好教授は社会学研究者としてのキャリアを月島調査に参加することから出発させているが、それ以来養われてきた実証的調査研究への見識が十分生かされていると考えることができる。

その第4は、研究の背景に常に実践的志向が存在したと理解される。

「不良少年に関する調査」の「四 結び」において不良少年感化の根本観念として医療、職業指導、情操教育のあり方について提起していること、『不良児童と職業との関係』の「七、結び」の（三）において職業指導、さらに教護院における職業教育のあり方について提起していること、『少年と社会関係の異常性』の「第七 結語」において青少年の問題行動に対する「治療及矯正」のあり方、特に「社会学的方法」の可能性を提起していることに代表されるように、三好教授は常に研究結果から実践に有効な提言を示そうとする志向を強く持っていたという点に意義があると評価することができる<sup>32)</sup>。このような実践的志向は早くから意識していたものであって、青少年の問題行動に関する領域でも、「ビック・ブラザー運動に就いて」（『社会と教化』3巻7号、1923（大正12）年）、「不良児童の豫防」（『社会教育』2巻2号、1925（大正14）年）、「セツツルメントに就いての考察」（『社会教育』2巻6号、1925（大正14）年）「児童愛護の目標のために」（『社会事業』12巻11号、1929（昭和4）年）<sup>33)</sup>、など多

くの实践活动に示唆を与える論考を発表している。なお、実践的志向は三好教授が東京市社会局、熊本県（社会事業主事）に勤務した实践活动の経験も影響していると考えられる。さらに遡るならば、前稿で明らかにしたように三好教授が米騒動（1918（大正7）年）に代表される社会情勢を見て社会学研究の道へ進んだという動機とも関係していると考えられることができる。

以上で指摘した4点も含めて総括的に考えるならば、三好教授の青少年の問題行動とその原因についての研究は実証的な調査研究であるが、前稿で取り上げた『社会事業大綱』（1936（昭和11）年）『社会事業精義』1939（昭和14）年）で示した社会事業の対象の基本を「不合理なる社会的関係」、「社会的異常性（=社会結合の異常性）」であるとし、社会病理現象の基本を社会関係の異常性ととらえる考え方を理論的な基礎として明確に持つ研究であって、単なる実態報告ではなく科学的研究と評価することができる。さらに、青少年の問題行動についての先駆的な社会的・実証的研究であり、月島調査を社会学研究の出発点とする三好教授の問題意識・研究方法論が遺憾なく発揮されている。これらの点から総合的に判断して、三好教授の青少年の問題行動についての研究は、研究史上、今日においても高く評価することができるとの筆者の考えを示して本稿を終わりとしたい。

（2019年12月稿）

#### 【注】

- 1) 高島秀樹「三好豊太郎教授の『社会事業』研究（1）—『社会事業』の概念・基礎理論—」（『明星大学社会学研究紀要』第39号、2019、所

収）33～34頁、注1）～3）参照

2) 同上、21～38頁

3) 同上、24頁

4) ここに記したテーマ選択理由に加え、個人的



理由を付言させていただくならば、筆者は教育社会学を専攻し、このテーマに親和性を感じたことにもよる。

- 5) 三好豊太郎『社会事業大綱』1936年、8頁/153～157頁

- 6) 三好豊太郎『社会事業精義』1939年、729頁

- 7) 三好豊太郎「不良少年に関する調査」（三好豊太郎『草創期における社会事業の研究』1989年、所収）3～83頁

この調査研究に関してより簡略化された報告が、『社会と教化』3巻6号、1923（大正12）年6月号に三好豊太郎「不良少年と社会診断」として掲載されており、執筆時期は（1923、4、20）と末尾に記されている。

なお、この調査研究が実施された1922（大正11）年当時、三好教授は東京市社会局に調査係として勤務していた。調査や集計等は、戸田貞三・林恵海・古坂明詮の協力の下に、東京帝国大学社会学研究室的の学生が戸田貞三担当の「社会調査法」の演習の一環として実施したと記されている。

- 8) 三好豊太郎『不良児童と職業との関係』1936年、1～104頁

- 9) 三好豊太郎『少年と社会関係の異常性』1937年、頁表記なし

- 10) 同上、頁表記なし

- 11) 同上、1頁

- 12) 同上、1～3頁

- 13) 同上、3～4頁

- 14) 同上、4～6頁

- 15) 同上、6～7頁

- 16) 同上、41頁

- 17) 同上、42頁

- 18) 同上、42頁

- 19) 同上、93頁

- 20) 同上、93頁

- 21) 同上、93～94頁

- 22) 同上、128頁

- 23) 同上、128～137頁

- 24) 同上、137～143頁

- 25) 同上、143～154頁

なお、「第六 発生原因並に類型の考究」の冒頭の目次には「四、社会関係及生理的欠陥」と記されているが、本文中にはこの項目がなく、「生理的缺陷及遺傳關係」、「社会関係及生理的缺陷」は「三、社会関係の異常性及遺傳關係」（目次と題目が異なる）の記述の中に含まれ、「四、」はなく、次の項目は「五、類型の考究」になっている。

- 26) 同上、154～158頁

なお、表中「計 12.5」と記されているのは「計 125」の誤り、「一人當り 12.5」は「一人當り 1.25」の誤りと考えられる。

- 27) 同上、158～160頁

- 28) 佐藤健二「解説」（三好豊太郎『草創期における社会事業の研究』1989年、所収）421～422頁

- 29) なお、1924（大正13）年には『社会学雑誌』創刊号に論文「不良少年の社会的考察」、同年に『社会政策時報』48号に論文「少年労働と少年犯罪」を掲載しており、この時期から青少年の問題行動について認識し、その社会学的考察を行っており、文字通り先駆的研究と位置づけることができる。

- 30) 住田正樹「社会化と逸脱行動」（住田正樹・高島秀樹編著『子どもの発達と現代社会・教育社会学講義』2002年、所収）183～185頁

- 31) 前出、注28）と同、423～424頁

- 32) 前出、注8）と同、104頁／前出、注9）と同、160頁

- 33) 「ビック・ブラザー運動に就いて」（『社会と教化』3巻7号、1923年、所収）35～39頁

「不良児童の豫防」（『社会教育』2巻2号、1925年、所収）56～62頁

「セツツルメント<sup>(ママ)</sup>に就いての考察」（『社会教

育』2巻6号、1925年、所収）29～35 頁

「児童愛護の目標のために」（『社会事業』12巻11号、1929年、所収）

- \* 引用出典頁表記について、あまりにも煩雑になることを避けるため引用頁表記をまとめて表記した場合があることをご了解いただきたい。

#### 【参考文献】

三好豊太郎「不良少年に関する調査」（三好豊太郎『草創期における社会事業の研究』1989年、株式会社 明石書店、所収）

三好豊太郎『社会事業大綱』1936年、章華社

三好豊太郎『不良児童と職業との関係』1936年、

財団法人中央社会事業協会社会事業研究所

三好豊太郎『少年と社会関係の異常性』1937年、

財団法人中央社会事業協会社会事業研究所

三好豊太郎『社会事業精義』1939年、株式会社三省堂

佐藤健二「解説」（三好豊太郎『草創期における社会事業の研究』1989年、株式会社 明石書店、所収）

住田正樹「社会化と逸脱行動」（住田正樹・高島秀樹編著『子どもの発達と現代社会・教育社会学講義』2002年、株式会社 北樹出版、所収）

- \* 本稿作成にあたって参考とした文献であっても、多数となることを避けるために前稿【参考文献】に記載した文献は記載を省略した。ご了解いただきたい。

#### 【付記】

1. 個人情報の記載に関して、今日の時点では個人情報の保護の観点から考えなければならない点があるが、原著において一応仮名の処置が取られていること、刊行以来相当な年月の経過があること、文献検討・研究の対象であること、歴史的文献であることなどから、原文のまま掲載した。ご了解いただきたい。

2. 引用部分には、今日の時点では不適切と考えられる考え方や、差別的表現と考えられる語句・表現が含まれるが、本稿は歴史的な著作の紹介・分析を目的とするものであり、学説的な検討を加えるためには刊行当時の認識を明らかにすることが必要であると考え、修正を加えることなく原文のまま掲載した。ご了解いただきたい。

（たかしま ひでき、本学名誉教授・元：本学科教授）